

第5回宝塚市議会意見交換会記録 第3部

※ この記録は、市民発言者と議員の意見交換の様子について、書記として参加した議員が記録したものを元に作成しています。

テーマ「障がい者施策について」

① 障害福祉課は日常生活用具などの給付に対して視障協関与しすぎ

市民 現在、視覚障がい者に対して日常生活用具として、点字器、拡大読書器等が支給されているが、対象は2級以上である。

昨年1月から地デジラジオが3級以上に支給されるようになったが、支給までに1年かかった。

視覚障がい者には情報が一番大事である。音声パソコンを支給してほしい。

市はパソコン教室を開催しているが、運営は視障協に丸投げで、折角受講しても、自宅に音声パソコンが無ければ意味がない。

音声パソコンの要望は5～6年もかかっている。

また、今後は就労にも力を入れてほしい。

議員 宝塚市障害者差別解消に関する条例が制定され、今まで以上に多様な状況に応じた支援の土壌が出来た。

音声パソコンについても必要な方には支給を進めていきたい。

就労等の相談については一律にはいかないが、他市の状況も見ながらしっかり受けとめたい。

② 視覚障がい者の白杖の所持率

20代から50代の就業率

市民 安倉の総合福祉センター（障害者自立支援センター）で、2年間も就職が決まっていない人がいる現状がある。その人は音声パソコンの古いバージョンしか自宅にないので就業支援講習におけるパソコン講習の予習や練習ができない。そのため就業にもつながらない。だから、音声パソコンを無料で貸してあげて、力になってあげてほしい。

また、市役所においては、「白杖がいりますか？いりませんか？」と聞かれるが、

最初に断っても後に必要になる場合がある。

最初に障害者手帳をもらう際には自分でも白杖の重要性を認識していない人が多く、本来なら窓口で白杖の必要性を説き、全員に配るべきである。

自分も、日本ライトハウスで歩行訓練した。

宝塚市から支給される白杖は、折り畳み式で短い。脇の下までの正しい長さが必要である。また、杖の先の石づき部分がすり減るので、交換費用の負担が大きい。補助できないか。

昨年近鉄電車ホーム転落事故があった。白杖をもつ意味を理解していなかったのではないか。

だれにも手帳と白杖を同時に渡してほしいが、職員は「デリケートな問題なので一概には言えない」と言う・・・視覚障がい者は死んでもいいのか・・・

「白杖所持率100%」と答えてほしい。

議員 432人中55人が白杖を所持している。障がい者の就職率は32.4%だが、視覚障がいだけではわからない。

市民 必要だという人にお渡ししているというが、白杖の必要性をどう説明しているのか。障害者手帳を渡すときに、全員に渡してほしい。

議員 白杖を全員持つべきであるとの意見だと理解した。脇の下からの長さであること、消耗品の交換に補助金があればいい、という要望。しっかり調整し対応する。

市民 就業については2年も放っておいた。

議員 就労はどのような人でもすべてうまくいくわけではない。何が必要なのか精査していく。

市民 窓口の職員は制度を知らないのか。

議員 職員の資質向上・教育について調べておく。

市民 盲人をどうイメージしているのか。

議員 全盲の人も、そうでない人もいると認識している。

市民 白杖は全盲者だけが持つものだと思っていないか。

議員 そうは思っていない。安全な生活のために一人ひとりのニーズにしっかり対応していくことが必要。

市民 白杖の所持率が低い原因は、白杖＝全盲というイメージをもっているのではないか。実際は全盲2%、弱視98%だ。世間の皆さんの認識を改めていただきたい。

.....
③ 学校での合理的配慮と、福祉と学校など本人を取り巻く支援者との連携について。他市の状況も踏まえて宝塚市の現状について

市民 障害のある子もない子も、心豊かにこの宝塚で生き生きのびのびと成長していくために、どうすれば良いかを一緒に考え、行動する仲間でありチームメイトとして話をしたい。

「前向きに」「建設的に」が私たちのキーワード。

子ども発達支援センターについて、相談支援員の増員と質の向上、「個別の支援計画活用の手引き」を作成してほしい。

発達の遅れがあるとわかった時点で早急に支援につなぐシステムをつくってほしい。

議員 個人個人にそった計画が重要だと感じる。

市民 自閉症、発達障がい児には工夫が必要。診断も必要。

議員 教育と福祉の連携が必要。医師の診断についての判断が難しい。保護者の悩みも違っている。学校現場でも子どもに寄り添う手立てを考えている。

まだまだ不十分だと認識している。

職員も教職員もしっかり勉強してすすめていけるように議会も声を上げていく。

いっしょに考えていく姿勢をもっていきたい。

市民 実施されている施策について、資料をつくり、その資料に基づいた支援を考えてほしい。

議員 まわりの理解がないことで困りごとがでてくる。どういったことがあるか。

市民 見た目でわかりにくい子どもが多い。聴覚過敏、感覚過敏。板書ができない。
いろんなケースがある。

議員 本人を中心としたケース会議。支援センターの充実が必要だと考える。

市民 関係者を集めた支援会議が必要。専門家参加で。手引書の作成が一番。